

店舗型精神障害者小規模作業所における地域住民との交流のあり方と
今後の小規模作業所の役割について
A 精神障害者小規模作業所の事例を通して

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
梅本 育子

障害者に対する偏見の解消には、地域住民と障害者が日常的な場面で、継続的に両者が対等な立場で行なわれることが有効だといわれている。

本研究では店舗型の精神障害者社会復帰施設における接触体験が地域住民に及ぼす影響を調査し、店舗型施設の意味や課題などを明らかとすることを目的とする。

研究 では、リサイクルショップを運営する A 精神障害者小規模作業所（以下 A 小規模作業所）を対象に、店舗型作業所が地域住民とそこで働く職員にどのように受け入れられているのかを明らかとするため面接調査を行った。面接調査は、男性 2 名および女性 5 名の計 7 名の顧客と男性 1 名および女性 1 名の計 2 名も職員を対象に行った。面接形態は個別およびグループ（3 名およびおよび 2 名）の半構造化面接である。面接時間は個別およびグループに関わらず、1 回 30 分を行った。その結果、顧客のほとんどが始めは A 小規模作業所が精神障害者のための施設であることを知らず、単なるリサイクルショップとして利用を始めていたことがわかった。面接対象者はこのリサイクルショップを利用するまで精神障害者との接触体験はあまりなかったが、リサイクルショップを利用することで、今まで持っていた精神障害者への印象がよいものに変化したと述べた。また、従来の作業所に比べ、店舗型作業所では障害者と地域住民との自然な交流がおこなわれていた。

次に研究 では、研究 で対象となったリサイクルショップの客層等の基本情報を明らかとするため、61 名の来店客に対して質問紙調査を行った。その結果、来店客の 77.2% が 40 代以上の女性であり、91.2% が 3 回以上利用したことがあるリピーターであった。また、リサイクルショップを知ったきっかけとしては、近隣に住んでいたからという回答が最も多かった。そして、このリサイクルショップの魅力については、値段に魅力を感じるという回答が 37.4% で最も多く、リサイクルショップに「満足している」と回答は 62%、「普通である」という回答は 33% であった。

これらの研究 、研究 の結果から、精神障害者小規模作業所が作業の一つとして店舗を運営することの大きなメリットは、福祉に興味がない地域住民が作業所に訪れる機会が増えることであることが明らかとなった。そして、作業所であることを知らずに店舗を利用し続けることで、作業所であることを自然に理解し、店舗を通じて自然な形で障害者と日常的な交流を持つことができた。地域住民が店舗の利用を通じて交流を図るうちに障害や福祉について理解を深められるという効果が考えられるだろう。一方、デメリットとしては、単純作業に対し店舗での仕事はストレスを感じやすい仕事であるということである。